

平成30年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III **スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築**
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V **スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成**

学校名【豊田市立市木小学校】

1 実践テーマ	【Ⅲ、Ⅴ】
2 実施対象者	市木小学校4・5・6年児童、保護者 (233名) (10名)
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 ( ) ② <b>行事名 ( スポーツで世界とつながろう )</b> ③ その他 ( ) (2) 地域における活動 ① イベント名 ( ) ② その他 ( )
4 目標 (ねらい)	・義足体験、佐藤圭太選手による講演、パラリンピック・アスリートとの交流を通して、スポーツやパラリンピックに対する興味・関心を高める。
5 取組内容	<p>行事「スポーツで世界とつながろう」                  講師：パラ陸上 佐藤圭太選手（トヨタ自動車）</p> <p>I 義足体験【6年生児童全員】                  体験用の義足（競技用のものと同様のカーボン製）を準備していただいた。4グループに分かれて、義足を装着し、約10mのマットの上を往復する体験をした。</p> <p>〈児童の感想〉                  ○義足体験をして、なれないうちはとても大変だなと思いました。ふだん、自分の足で歩く時とは全然違う感覚で、普通に歩くのはとても難しかったです。佐藤選手は普通にジャンプしたり走ったりしていたけど、なれるまで相当時間がかかったと思います。</p> <p>II デモンストレーション                  6年生代表児童が佐藤選手に挑戦！ということで、体育館内で短距離の競争を行った。競技用の義足をつけて走るパ</p>





ラ・アスリートの迫力ある走りを見た児童は、勢いに圧倒されつつ、自分も一緒に走りたいという希望者が殺到した。

### Ⅲ 講演会【4・5・6年生】

・義足をつけることになった経緯、障がいやパラリンピックに参加して感じたことなどを話していただいた。子どものころからサッカーに親しみ、ゴールキーパーとして活躍していたが、15歳でユーイング肉腫によって脚を切断したこと。走ることを楽しいと感じて、パラ陸上の道に進んだこと。ロンドンとリオデジャネイロのパラリンピックに参加した経験を通して実感した、自分自身や周りの人を「リスペクト」することの意味。さらに、「自分を超越すること」は「他人と比較すること」よりもはるかに大事」という、心に響くメッセージをいただいた。「障がい者と健常者の違いがなくなる日はもうそこまで来ている」という言葉から、そういう社会にしていきたいと

いう佐藤選手の願いが伝わってきた。

・講演会後には、持参してみえたリオパラリンピックの銅メダルを、児童全員に触れさせてくださった。オリンピックのメダルと違って、パラリンピックのメダルは目が見えない人にも判別できるように、金・銀・銅のそれぞれで違う音がするという事も教えていただいた。

〈児童の感想（一部抜粋）〉

○私は佐藤選手の講演会の前まで「障がい者の人ってなんかこわい」と思っていました。しかし、佐藤選手の講演を聞き、「パラリンピックかっこいい」「障がい者って意外とふつう」と思いました。

○佐藤圭太選手の話を知っていたら、障がいがあっても他の人といっしょ、意外と普通ということが分かったので、もう障がいのある人でもこわいなんて思わなくなりました。それに今ではすごくかっこいいと思えるようになりました。なので、2年後のパラリンピックは絶対見ようと思いました。

○・・・二つ目は義足なのに堂々としているのがすごいということです。足を切ってもスポーツをしたいという心もすごく、人前で堂々とお話ができる佐藤選手がすごくかっこいいです。

○佐藤選手の講話を聞いて障害者への考え方が少し変わりました。今まで義足の人や障害のある人を見て、「変な人」とか「かわいそう」とか思っていたけど、そういう考え方は違ふと分かりました。この「スポーツで世界とつながろう」を通して、相手や自分をリスペクトすることなどを忘れずにこれからの生活に生かしていきたいと思いました。

○・・・話を聞く前からパラリンピックを見ていて、体は不自由でも皆スポーツが好きなんだな、すごいな、かっこいいなと思っていたか

らです。でも、それくらいしか思っていなかったので、パラリンピックの会場では体の不自由な人が足りないところ、たとえば目に見えない人に義足をつけている人が「ここにはこういう物があるよ」などと教えたりして助け合っていると聞いて、驚きました。

○佐藤選手は「リスペクトする」と何回も言っていました。リスペクトって何だろうと始めは思ったのですが、佐藤選手が他の選手のことを尊敬して、自分で吸収すると言っていて、リスペクトって必要なんだなぁと思いました。

○「メガネをかけていると健常者 メガネをかけていないと障害者」という佐藤選手の話に共感しました。昔は「メガネをかけている人は障がい者」だったことには驚きました。今はメガネをかけていても特に気にしていません。「長いときがたてば、障害者と健常者のしきりがなくなる」という佐藤選手の言葉が心に残りました。

○ぼくは佐藤選手の話聞くまで、障がい者の人のことをこわいとかあまり関わったり近付かないほうが良いと思っていました。でも、佐藤選手の話聞いて、障がい者と健常者の違いはあまりないのかなと思いました。佐藤選手の「障がい者と健常者の違いがなくなる日はもうそこまで来ている」という言葉がとても心に響きました。



#### 6 主な成果

- ・パラリンピックは、オリンピックに比べると児童にとって馴染みが薄い。パラ・アスリートである佐藤氏から直接お話が聞けたことで、パラリンピックが児童にとって身近なものになった。2020年の東京パラリンピックで佐藤選手を応援したいという児童が多かった。
- ・義足をつけた方に会うのは初めてという児童が多く、目の前で義足を外したり装着したりする様子を見せていただいたことで、衝撃を受けた児童もいたが、話を聞くうちに「障がい者」の受け止め方が変化したことが感想から読み取れた。「障がい者」を自分たちとは違う存在に感じていた子どもたちが、障がいがあっても自分たちと変わらないと実感できたのは大きな成果である。
- ・病気のために足を切断してもスポーツをしたいという佐藤選手の思いに、スポーツを楽しむことの素晴らしさを改めて感じた児童も多かった。

#### 7実践において工夫した点(事業の特色)

- ・地元企業であるトヨタ自動車株式会社の社会貢献活動として、体験用の義足を無償で準備していただいたうえ、講師料もかからず、貴重な体験をすることができた。

#### 8主な課題等

- ・学ぶことの多い体験活動だったが、協力してくれる企業あつての行事なので、学校側の要望だけでは実施できない点が課題である。

9来年度以降 の実施予定	<ul style="list-style-type: none"><li>• 義足体験と講演会は可能であれば、ぜひ実施したい。</li><li>• 講師招聘が難しい場合は、I'm possible.を活用した授業でオリンピック・パラリンピックやスポーツへの関心を高めていく。</li><li>• ラグビーワールドカップ参加チームとの交流活動（9～10月頃）</li></ul>
-----------------	---